

緑陰随筆 歴史ミステリーその4

戦国最後の傾奇者（かぶきもの）、前田慶次郎はなぜ米沢を

安住の地として選んだか？

くさかり小児科 草刈章

この度も米沢に関わる歴史ミステリーその4を紹介します。皆様は戦国時代の大変動期を自分の流儀に従って鮮やかに生き抜いた武将、前田慶次郎について知っているらっしゃるでしょうか。私は米沢の歴史的なことについては比較的知っている方だと自負していたのですが、彼についてはほとんど知りませんでした。2002年に放映されたNHK大河ドラマ「利家とまつ」では秀吉の前で奇抜な格好で剽軽な舞を舞い、利家を水風呂に入れて出奔するという逸話が紹介され、なぜか印象に残っていますが、この時は後日米沢に来たとは知りませんでした。ちなみに一昨年放映された大河ドラマ「天地人」には全く登場しませんでした。なぜかと今でも米沢では不思議に、そして残念に思われています。

数年前に米沢郊外をジョギングしたとき、万世町堂森、善光寺に「前田慶次郎」と染め抜いたのぼりが沢山たっているのをみました。これは何じゃと境内に入ってみると掲示板にその慶次郎が米沢にきてここに安住の地を得、穏やかな余生を送ったとありました。劇画「花の慶次」（隆慶一郎作、原哲夫画；週刊少年ジャンプ 1990~93）で取り上げられ、若者の間にはもともと人気のある戦国武将として有名になっていたのです。それではどのような経緯で米沢に来るようになったのでしょうか。

前田慶次郎は旧海東群荒子（現在の名古屋市中川区荒子）で天文10年(1541)頃に生まれたと言われています。父親は織田信長の家臣、滝川一益の従兄弟の滝川益氏であり、慶次郎はその庶子でした。父親が亡くなったため、母が尾張織田家に属する土豪、荒子城主前田利久と再婚、慶次郎も利久の姪と結婚、養子となりました。利久は前城主前田利春の長男であり、当然利春亡き後は家督を継ぐべき立場にありましたが、信長の「利久はその器量ではない、利家に継がせよ」との一声により、荒子の城は弟の利家が継ぐことになったのです。

その後の利久、慶次郎父子の行方ははっきりしません。母方の一族の滝川一益の元に身を寄せたとか、織田方の武将、林秀貞の家臣になったとの諸説があります。「米沢人国記」には京都に寄留し、著名な文化人や公家と交わり和漢古今の書と親しみ、連歌や王朝文学、茶の湯などを学び、弓馬などの武芸にも精進したとあります。その後の慶次郎の活躍や学識の深さをみると、京都寄留説

が説得力を持ちそうです。

本能寺の変を境に慶次郎周辺の間人関係の勢力図は大幅に変わり、豊臣秀吉の盟友、そして最大の協力者としての前田利家の地位は飛躍的に高まり、能登と加賀、二カ国を領有する有力大名となったのです。利家は急速に増大した領国経営のため信頼できる人材として利久と慶次郎を呼び寄せたのでしょう。利久は七千石を与えられましたが、そのうち五千石を慶次郎に任せたということです。

利久は天正15年(1587)に亡くなりましたが、血のつながらない叔父にこれ以上の義理立ては無用と突然、利家の元を出奔します。このときに利家を茶席に招待し「食事の前にまずひと風呂を」と湯屋に案内しましたが、そこは水風呂であり「ギャーッ」という悲鳴を尻目にゆうゆうと利家の愛馬「松風」にまたがって出奔したというエピソードが伝えられています。いかにも傾奇者らしい悪戯との見方もあるかもしれませんが、私は養父利久の家督の地位を奪った利家に対するささやかな意趣返しという気がします。

京都に出た慶次郎は、すでに最高権力者、秀吉から「いつでも好きなように傾奇がよい」と公認されたため、諸大名や文化人の間で引っ張りだこの人気者になりました。そんな中で茶人、千利休との縁で上杉景勝の家臣、直江兼続と知り合うようになりました。武芸だけでなく古今の学問や詩歌にも通じ、なにより時流に迎合せず自分の流儀をしたたかに貫く、自分と同じような志をもっている男だとお互いに認識したのでしょう。たちまち肝胆相照らす仲となり終生の友情を結ぶことになりました。

秀吉の死後、徳川家康はあからさまに権力奪取の策動を始めました。これを潔としない上杉景勝、直江兼続主従は京都を離れて新領地の会津に戻り、家康との決戦に備えるべく、領国の防衛体制を固めました。これを謀反と見なした家康は会津に糾問使を派遣しましたが、直江兼続はその指摘の一々に完膚なきまで論駁する書簡、世に言う「直江状」を送り、家康をして「これほどまでに無礼な手紙を受け取ったことはない」と激怒させたということです。そして慶長五年(1600)6月、上杉討伐軍を組織して大阪を出発させました。

臨戦態勢で喧噪に包まれる会津若松城下に朱塗りの槍を携え、青毛の駿馬にのった大身の武将が現れ、城の大手門をくぐりました。そして直江兼続の顔を見つめるなり、破顔一笑「九年待ったぞ。日本一の主君に下、わが手だれの血槍の舞い、存分にまわしてくれやい」と大音声を発しました。それは久しく音

信を断っていた前田慶次郎の登場でした。上杉が徳川に決戦を挑む、それは久しぶりに国内の大乱を予想させるものでした。慶次郎は血湧き肉踊る思いがし、上杉主従のために一肌脱ごうとやってきたのです。

景勝、兼続は陸奥の入り口、白河付近の革籠原（かわごはら）に長大な防衛陣地を造成し、討伐軍の到着を今や遅しと待ち構えていました。この地域は深田や泥田が多く、大軍ではすぐに身動きがとれなくなります。しかも時は梅雨、兼続は高さ 4m の堤防を築き、近くの川を氾濫させる作戦を立てていました。もし決戦が行われていたら、討伐軍の大敗は間違いなかったでしょう。しかし家康はその辺りをしっかりと読み切っていたと思われます。わざとゆっくりと進軍し、石田三成の暴発を誘ったのです。思惑通り三成が挙兵したと知るや小山から反転、三成との決戦に向かったのです。兼続は直ちに追走し家康を打つべしと進言しましたが、景勝は「謙信公以来、わが上杉家には背中を見せた敵を後ろから襲うような軍法はない」と拒否しました。家康を打つ千載一遇のチャンスは失われたのです。

上杉軍は東軍に組した宿敵、最上義光を討つことにしました。次々と最上領の支城を落として、本拠地の山形城を守る最後の砦、長谷堂城に達しました。それだけに頑丈に要害化され、鉄砲二百丁も揃え、最精鋭の五千の将兵が守っていました。そのため攻略に手間取り、明日は最後の総攻撃に踏み切ろうという 9 月 30 日の夜、会津に居る景勝から「去る 9 月 15 日、関ヶ原で東西両軍が激突、石田三成はわずか 1 日で大敗、全軍ただちに撤退せよ」との命令がくだされました。夜間の撤退となりましたが、最上軍は嵩にかかって攻めてきます。また様子を見ていた伊達正宗の配下の留守政景の三先の援軍も攻撃に加わり、撤退戦は困難を極めました。殿をつとめていた兼続は「もはやこれまで」と自害しようとしたとき、「待たれよ、御大将が弱音を吐いて何とされる。ここは拙者にお任せあれ。その間に体制を直されよ」と前田慶次郎が朱塗りの槍を持ってかえつけ、上杉の他の 4 人の槍持ち武将と一緒に、最上伊達軍のまっただ中に踊り込みました。阿修羅のような 5 人の活躍に両軍の追撃の勢いも弱りました。このような前田慶次郎の働きも合って、二万の大軍団の撤退も最小限の犠牲で奇跡的に成功しました。

関ヶ原合戦の翌年七月に上杉主従は上洛し、家康から会津 120 万石を召し上げられ、直江兼続の領地、米沢 30 万石への減封を言い渡されました。10 月末、これから冬に向かうという厳しい時期に越後以来の家臣団を一人も解雇するこ

となく米沢への移住を行いました。ある意味ではそれは戦場での戦い以上に苦痛と困難が予想される戦いでもありました。慶次郎も京都にいたのですが、「今度の合戦では諸大名の表裏の心には愛想が尽きた。主君と仰げるのは上杉景勝公の他になし」と、より困難な事業に立ち向かう兼続に助成すべく米沢に向かったのです。慶長6年(1601)10月24日から米沢へ到着する11月19日までの詳しい旅日記「前田慶次郎道中日記」を残しています。これは道中で出会った様々な人物や事物、風景などを具体的に描写し、古今の文献などの引用や自作の和歌を挿入など、慶次郎は相当の教養人であることを示し、文学作品としても当時の世情を知る民族学的資料としても価値が高いと評価されています。

兼続は移住した家臣団がなんとか生計を維持できるよう新田の開拓や用水の掘削、堤防の造成、産業の育成や商品作物の開発、そして学問所の設立と粉骨砕身の努力を行い、晩年の頃には実質五十万石の経済力を持つまでに発展させました。その一つに米沢の中心部を流れる最上川支流、松川の氾濫を防ぐための堤防「直江堤」があります。私の生家のすぐ近くにあり、子どもの頃にはものすごく巨大な堤防に思えたのですが、大人になって再び訪れてみると意外に小さいのに驚かされました。慶次郎は様々なことで兼続のよき相談相手になったことと思われます。また時には春の桜や秋の名月を肴に酒を酌み交わしながら心行くまで古今の文学について語りあったこともあるでしょう。米沢に移封された翌年の2月27日、兼続は城下の北方にある亀岡文殊堂に27名の同好の士を集め、和漢百首に及ぶ詩歌を奉納しました。慶次郎も参加し五首の歌を残しています。その一つ「吹く風に入り江の小舟漕ぎきえて、かねの音のみ夕波の上」と詠んでいます。

その後の慶次郎の事績を具体的に語る資料はありません。城下の東部、万世堂森に1200年余り続く善光寺には、慶次の供養塔が建立されており、慶次が他界した6月にはあじさい忌が行なわれています。供養塔の碑文には、「この地堂森に居を賜り邸を『無苦庵』と呼び悠々自適、この地を愛し郷民と親しみ、慶長17年6月4日70才の生涯を閉じた」と刻まれています。